

# アメリカの内側で見た ユダヤ人とドイツ人

—文化変遷の問題から最近のゲルマニスティクの傾向まで—

遠 山 義 孝

## ワイマール文化とアメリカ

ここ数年来「黄金の20年代」といわれるワイマール時代に関心を寄せるようになり、歴史・政治中心の従来のワイマール研究とは別に、これまで余り顧みられなかった大衆文化、軽文化等の視点から、この時代を解明してみたいと思うに至った。当時のベルリンはまさにあらゆるものが混淆した巨大な世界都市であった。第一次大戦での敗戦、そしてインフレによる「没落意識」が一方において浸透した反面、映画、演劇、文学寄席<sup>カバレット</sup>などが隆盛を見たのである。サラリーマン階級の顕在化に伴い、カフェー、映画館、キャバレー、ダンスホール等での遊興に、日常のうさを忘れる層が出現した事も大衆文化興隆の一因と言えよう。この時期はまたドイツにアメリカ文化が一大潮流として流入して来たという点で、それ以前に例を見ないものであった。世界の中心と考えられてきたヨーロッパが、初めて新大陸からの文化を受け入れるに至ったのである。レビューやジャズなどの大衆文化は、従来の文字を介しての文化等とは違った型のものとして急速に広まった。ジョセフィン・ペーカーの「バナナ・ダンス」などは、当時のベルリン市民を狂喜させ、そのフィーバーぶりは今でも語り草

になっている。レコードなどに象徴されるアメリカ文化は、いわば機械主義の文化であり、大量生産の文化であり、また音の文化でもある。ベルリンの「黄金の20年代」は、文化の面からすればアメリカニズムを抜きにしては語ることができないといえよう。またベルリン文化としてのワイマール文化を支えた、もしくは特徴づけたもう一方の旗頭にはユダヤ人たちがあった。ドイツにおいては、ユダヤ人は伝統的に都市に居住するのを習慣としてきたから、ワイマール文化がベルリンを中心とした都市文化であったことを考えれば、彼らがこの文化の強力な担い手となったことは、それほど不思議ではない。しかしナチズムの出現とともに彼らは共産主義者などと共に海外への亡命を余儀なくされた。1930年代になるとこれらの知的亡命者達が大量にアメリカに渡った。フリッツ・ラング、ビリー・ワイルダー、ジョン・ハートフィールド、グロピウス、ゲオルゲ・グロス、クラカウアー、クルト・ヴァイル、ブレヒト、ラインハルト等々、演劇、映画、写真、建築に関係していた人達も去って行った。哲学、文学、科学畑の人達に至っては枚挙に遑がない。そして彼らがアメリカ文化に与えた影響は少なからぬものがあった。1920年代、30年代という時代はヨーロッパとアメリカの一種の混淆文化が生まれ出る土壌となった時代と言えるのではないか。第二次大戦後に彼らが開花して文字通りの欧米文化として、芸術、文学その他の面で我々の前に立ち現われたといえると思う。

偶々昨年1年間(1981年4月～1982年3月)ハーバード大学に客員研究員として招かれたのを機会に、以上の文脈から、アメリカにおける亡命芸術家(文学者)達の系譜(殊にユダヤ人のもの)と、彼らを追い出したドイツそのものが、現在アメリカでどのような扱いを受けているかを、さぐってみた。

ワイマール文化とアメリカ文化が水底で接する筈の大衆文化(殊に映画、演劇)そのものに触れないのは片手落ちであるが、本稿では「アメリカのユダヤ人」と「アメリカのドイツ文学」という二つにテーマを限って、論じてみたい。

ただしここで言うアメリカは私が接し得た限りでのアメリカであり、具体的にはマサチューセッツ州のボストンを中心とするものである。アメリカのよう

な巨大な国は、何事も単純に普遍化することを拒絶する。この点が日本やドイツなどと大いに違うところである。すべてが画一的でないということは、受け手の印象に事実関係が左右されやすいことを意味する。したがって本稿では体系的に叙述するやり方をあえてとらずに、旅の日記風にこの二つのテーマにまつわる諸々の印象を綴ってみたい。これはいわば私のアメリカ体験記である。

わずか1年間の滞在ながら、アメリカ体験は私にとって非常に貴重なものとなった。既に Emerson が“The American scholar (1836)”の中で、アメリカ固有の文化の存在を強調しているが、これが今回私自身初めてのアメリカ滞在により実感することができた。長いこと自分の専門としてドイツ哲学、ドイツ文学をやってきた為、私の目は自然にヨーロッパに向き、意識の深奥に「アメリカに対するヨーロッパの優位」という感情があった。ところが今回アメリカに行って、アメリカ文化の優位とまでは思わないものの、アメリカの文化もあなどれぬという思いを強くしたのである。それを一言で言い表すなら、すべてのものを受け入れる文化の力強さと言えよう。左も右も貧しきも少数派も何もかも受け入れる。表面的に見れば、確かに黒人問題やベトナム後遺症とかいろいろあるのであるが、寛容 (Toleranz) の問題が文化の背景の一つになっている。Toleranzの問題はドイツでもレッシング以来のテーマであるが、ドイツではそれが文化的雰囲気醸成するまでには至っていない。やはりアメリカは移民による国家のためであろう。

### アメリカにおけるユードントゥム

私が籍を置いたハーバード大学は、もともとはメイフラワー号に乗って渡来した例の Pilgrim Fathers 系の Congregational 派、つまり会衆派教会の牧師養成のために1638年に設立された神学校がその起りである。このことからわかるように、長い間清教徒の子弟達の勉学の間であった。それが第二次大戦後、いわゆるヨーロッパ・アメリカン＝カルチャーの出現と共に、異教徒や少数民族出身の学生達が、叙々に増え始め、特にユダヤ人学生の進出が目立

つようになった。ボストン地域には、ウォルサム市にブランダイス大学というユダヤ人大学があるものの、ハーバードに入学を目指すユダヤ人学生はますます増える傾向にあるらしい。

ここで Brandeis University にふれておくと、この大学は1947年に創立され、今年創立35周年を迎えた比較的若い大学である。世界に散っていたユダヤ人が、その悲願として、自前の大学を持とうという動きを起し始めたのは第二次大戦中の事であった。ナチスのホロコーストが、その頃アメリカにもだんだんとわかって来ており、またヨーロッパの多くのユダヤ人インテリがアメリカに自由を求めて亡命して来た。彼らを中心に、イスラエル建国の話とは別に、ユダヤ民族のためにひとまず身近な所で自分たちの大学を作ろうという話が持ち上がり、その結果出現したのがブランダイス大学である。創立構想が練られたのは1941年頃のことという。当時アメリカの最高裁にはフランクフルターというユダヤ人の長官のもとに、やはりユダヤ人のブランダイスという判事が活躍していた。後年『孤独なる群衆』によって有名になるデビッド・リースマンが、ブランダイスの秘書をしていた。このブランダイスという人物が、その頃アメリカ・ユダヤ人の中で最も尊敬され、信頼されていたようで、設立評議会は全員一致でブランダイスの名を新大学に冠することを決定したという。Brandeis というのは、もともとチェコのペーメンにある一寒村の名前で、彼の祖先は、そこからアメリカに移住して来たらしい。創立準備に手間どり、結果的にはブランダイス大学は第二次大戦後に開学の運びとなった。それでもイスラエル建国以前には創立されたのである。そして現在ではアメリカでも有数の大学に育っている。

規模はそれほど大きくはなく、学生数は3,500名（内大学院生500名）で、Student ratio は10対1と恵まれている。ハーバード大学と比較すると、規模では約 $\frac{1}{6}$ である。ハーバードは学部の学生数6,000名、ロースクール、ビジネススクールなど10学部にあたる大学院レベルの学生数が1万名、計1万6千名の典型的な大学院大学である。

ブランダイス大学は規模は小さいが、優秀な教授陣を擁しており、その殆ど

がユダヤ人とのことである。学生は約65%がユダヤ人で、残りは一般学生とのこと。この比率は日本の創価大学に似ている。双方とも宗教を母体に行っていることでも同じである。ブランダイス大学には、世界にここにしかない「ホロコースト研究所」をはじめ、Judaism 研究の諸機関があり、またイスラエル建国以前にできたユダヤ人の大学として、今なお世界中のユダヤ人の精神的拠り所となっている。アメリカのユダヤ人は大部分が、N Y 市に住んでいるのであるが、外国在住のユダヤ人は、アメリカを訪れるとわらじをぬぐつもりで、このマサチューセッツ州の小さな町ウォルサム市にあるブランダイス大学に一度は顔を出し、未知の人と知りあったり、あるいは互いに旧交を温める場としているらしい。ドイツ語科のスタッフは Prof. Zohn (chairman), Prof. Frey, Prof. Hofmeister, Prof. Harth の4名である。学科長のゾーン教授はウィーン生まれのウィーン育ちのユダヤ人で、1939年に亡命、アメリカにやって来た。彼の子供の頃は、家庭では母親がまだイディッシュ語を喋っていたという。Prof. Harry Zohn はワイマール文化に造詣が深く、アメリカのドイツ文学界の泰斗で、ノース・ウェスタン大学の Prof. Erich Heller と並び称されている。私はこのゾーン教授と親しくなるにつれ、彼の中にユダヤ文化とドイツ文化の共生を見出す思いがした。今となっては東欧ユダヤ人の生み出したイディッシュ語も、死語になりつつあるが、ゾーン教授は自分の体験からイディッシュ文学を講ずことのできる数少ない一人である。更に私が感動したのは、彼がドイツ文学を心から愛していることである。現在のアメリカでは後でふれるようにドイツあるいはドイツ文学に対する関心は極めて低い。日本文化に対する関心の方がむしろ高いと言える位である。ゾーン教授はドイツ文学に対する現今のアメリカ人の無関心をさかんに嘆いておられた。ブランダイス大で独文を専攻している学生は学部全体でわずかの5名、ハーバードのような有名大学でも、学部全部で18名という信じられぬ位の少人数であった。日本の主だった大学には、少なくとも50名規模の独文学科があり、中には1学年50名定員のドイツ語科を持っている大学もある。数で見ると、ドイツ語専攻学生の彼我の差は歴然としている。

ゾーン教授は、特にトゥホルスキー、カール・クラウス、シュテファン・ツヴァイク、ベンヤミン、テオドア・ヘルツルの研究家として知られ、彼らに関する著書や翻訳も多い。<sup>(1)</sup> ツヴァイクの『昨日の世界』や、アルフレッド・ボルガーの『カフェー・ツェントラルの理論』などで描かれた往時のウィーンを知っており、カフェー文化の雰囲気や今に伝えようと、大学の食堂の一角に“German Table” (Deutscher Tisch) を設けて、コーヒーを飲んだり、昼食をとりながら、自由な打ち解けた雰囲気の中での知的交流を促進している。誰にでも門戸は開放されているが、そこに坐る者はドイツ語を話す、つまりドイツ語で会話をするという原則がある。ドイツ語専攻の学生にとっては、ここは授業以外の、会話修業の道場という感を呈していた。このような Einrichtung は、日本でもみならったらよいと思った。この German Table にはスラブ語の先生も顔を出しておられた。それはこの大学ではドイツ語とスラブ語が、一緒になって一学科 (Germanic and Slavic Languages) を構成しているためである。ゾーン教授は学科長としてスラブ語にも関係しているのである。

イディッシュ語は彼等の言によると、もはやニューヨーク市を除いて、殆ど話されることのない滅びゆく言語とのことであった。少し事情は違うがアイヌ語と同じ運命にあるらしい。アメリカでも、ノーベル賞を受賞したシンガーあたりまでは、イディッシュ語で書いた作家も居たが、今はそれもなくなくなってしまったとのこと。イディッシュ語の母体であった東欧ユダヤ人が物理的に存在しない現在、それは当然の成り行きであった。アメリカへ移住して来た東欧ユダヤ人もだんだん高齢になり、イディッシュ語を話す絶対数がごく少なくなった。その上新しい世代は戦後生まれであるから、誕生した彼らの祖国の正統ヘブライ語を習得するよう定められていた。ブランダイス大学は、ユダヤ人大学であるから、当然のことながら、語学はヘブライ語の教授が中心で、ヘブライ語コースはきちんと揃っているが、イディッシュ語はほんの飾り程度にあるだけである。イディッシュ語は既に過去のものとして、歴史として教わっている感じである。学生はヘブライ語を覚えてイスラエル大学へ留学するか、少なくとも在学中に一度は祖国イスラエルを訪れるのが夢なのである。ある学生は

私の質問に、「イディッシュ語など今頃やっても、何の役にも立たない」と答えた。一般の学生はドイツ語の素養もないから、もしもイディッシュ語を習得する場合、新しい外国語を習うのと同じ困難を覚悟せねばならないのである。シンガーの場合も、イディッシュ語で書いた時も英訳を担当する協力者が居た為、広く読まれることとなった。彼の“A Friend of Kafka”も、英語になって広範の読者を獲得したのである。シンガーがイディッシュ語の最後の作家と言っても差しつかえないと思う。現今のユダヤ人作家では、スーザン・ソングと並び称される、シンシア・オジック女史がイディッシュ語に関心を持って書いているが、彼女は最初から英語で書いている。(cf. Cynthia Ozick: “Envoy ; or Yiddish in America”)

書店には、部厚なイディッシュ語の辞書が幾種類も売られているが、それらは学問的な辞典として売られているのである。イディッシュ語が、まだ少し残っているのはニューヨークの一部分だけのようで、そこでは小型のポケット判イディッシュ語辞典 (z. B. Uriel Weinreich: SAY IT IN YIDDISH. Dover Publications, Inc. New York) が売られている。昔はニューヨークにはイディッシュ語の劇場も有ったようであるが、今や実際会話のできる層の減少に伴って開店休業状態に追い込まれたとのことである。アレイヘム作の『屋根の上のヴァイオリン弾き』などは英語に翻訳されたことにより命脈を保っている。

ハーバード大学にはイディッシュ語の講座がまだあるが、結局イディッシュ語の歴史的背景などの説明が中心で、会話はごく基本的なパターンの習得に限られていた。ラテン語の会話を習うのと相通ずるところが感じられた。もっともラテン語ほどまでにはすたれていない。それはゾーン教授のように子供の時にイディッシュ語を覚えた人達が少数ながら現存するからである。私の滞在期間中にハーバードで、イディッシュ語による三つの講演が有った。それは Center for Jewish Studies が主催したもので以下の3つであったが、聴衆の殆どは老人達であった。講演者は三つとも Chaim Grade という同一人物であり、いわば連続講演とも言えるものであった。紹介によるとこの人は詩人、小

説家とのことである。

1. The Talmudic Scholar in Yiddish Literature.
2. Were the Yiddish Writers in Russia Marranos?
3. Folk-Life and Tradition in Lithuania.

イディッシュ語を本格的に聴いたのは、この講演が初めてであったが、ドイツ語と良く似ているという印象を受けた。ドイツ人がイディッシュ語のことを、かつて Judendeutsch と呼んだことがうなずけた。ドイツ語を耳から聞いて理解できる者には、イディッシュ語はそれが喋られる限り、かなりわかるということである。しかし文字で書かれると、ヘブライ文字であるから、ヘブライ文字を知らぬ限り理解不能ということになる。ここにイディッシュ語が減びゆく一因があると思われる。つまりユダヤ人の子弟は母国語のヘブライ語は習うが、今やドイツ語を勉強することは殆どない。逆にイディッシュ語の母体であるドイツ語に通じている学生、つまりドイツ語を専攻する学生達は、殆どが非ユダヤ教徒で、ヘブライ語を知らないため、イディッシュ語習得に困難がともなうのである。東欧のユダヤ人およびその子孫が、東欧に居る限りヘブライ語やスラブ語が、ドイツ語にまじっても共通感覚がうまく働いていたのであるが、彼らの大半がアメリカに移った時点で、イディッシュ語の衰退は予測されたのである。なぜなら彼らも他の移民同様、生きのびるためにアメリカ化を指向したからである。したがってイディッシュ語の研究には今やアメリカよりイスラエルの方が適しているようである。

以上はイディッシュ語についての見聞であるが、ユダヤ人に話を戻すと、ブランドアイスを別にすれば、ハーバードには著名なユダヤ人の学者が非常に多い。あるアメリカ人学生が冗談まじりに、ハーバードにはユダヤ人の学者が一番多く、次に日本人、純アメリカ人は一番少ないと言っていたが、あながち誇張とは言えない。現在ハーバードには日本にも良く知られている Henry Rosovsky, David Riesman, それから Stanley Hoffmann, Daniel Bell, Karl Deutsch, Robert Nozick 等々錚々たるユダヤ人学者が居る。ハーバードと相互乗入れをしているお隣の MIT には Noam Chomsky がいる。彼の父は rabbi で、ド



イツ系のため、彼は英語とドイツ語の2ヶ国語で育ったという。このようにユダヤ人学者がこのところハーバードに非常に多くなって来た。それは現在ハーバード大学が、創立当初と違って宗教的差別をせず、宗派と無関係の立場をとるようになったことと関係がある。ユダヤ人がハーバードのような Ivy League の大学に多勢入るようになったのは、ユダヤ人が一般に教育に対して非常に熱心であるからである。Jewish Mother という表現があって、日本の教育ママのように小さい時から、つきっきりで教育にあたるユダヤ人の母親のことをいう。彼女等にとって、息子は将来「doctor か lawyer」というのが決まり文句である。事実医者7割はユダヤ人とのことである。子供たちを synagogue や日曜学校にも通わせ、ユダヤ人としての自覚をも得させる。したがって彼らは同年輩の子供達と余り遊ぶ機会がない。そのため他のアメリカ人との間に軋轢が生じ始めているという。

ハーバードにユダヤ人学生の集会所となっているリースマン・センターというのがある。ここに毎週1回ユダヤ人が集まって、お茶など飲みながら、家族的な雰囲気の中で講演を聴く。私もここに何度か顔を出し話を聞いた。ことに社会学者ダニエル・ベル教授の講演“City College, Gateway to America: Reminiscences.”はたいへん印象深いものであった。東欧から7歳の時に、アメリカに渡って来た時の話に始まって、ニューヨーク市立大学を足がかりにアメリカ世界にとけこんでいく様子をいろいろのエピソードをはさみながら生き生きと語った。ベル教授の最初の国語はイディッシュ語とのことであった。ニューヨーク市立大学というのは、今でもそうであるがニューヨーク市民であれば誰でも入学できる。授業料も安く当時はただ同然であっただろう。したがって戦前の東欧ユダヤ人にとってニューヨーク市立大学に入学できることは一つの希望であり、張り合いであった。

Reminiscence というタイトルであったから、講演というよりも雑談的な調子で、話し手と聴き手が一体となって、和やかな家族的雰囲気がかもし出され、ユダヤ人の仲間意識が感じられた。

ベル教授の話によると1930年代、Easteuropean Jew にはプリンストンや

ハーバードなどの私大に行く金銭的余裕が無かった。ベル教授がニューヨーク市立大に入った時も、彼はアルバイトで、一切の学資をまかなったという。集会室は200人近いユダヤ人で満員であったが、ベルは学生たちに向かって“pusher”を知っているかと尋ねた。誰も答えられないと、車の後押しのことと彼のやったアルバイトのうちの一つであると言った。その頃はまだ荷馬車を六番街あたりでは見かけることができ、坂になると押したことから pusher と言ったのであると。そのような苦勞をして彼は今やハーバードを代表するような学者になったわけである。また興味深かったのは、貧しいユダヤ人達は、上の兄弟が働いて、一番下の弟だけは大学に送り込んだという話であった。これを聞いた時、ある意味で我々日本人に非常に似ているところがあると思った。このような家族意識は昔は日本でもかなり一般的であったと思う。女の場合は昼間働いてニューヨーク市大や、ブルックリン大学の夜間に通ったようである。講演の後、年輩の人達の苦勞話を若い連中が熱心に聞いていた。現世代のユダヤ人の子弟は、ハーバードなどの私学に進出するまでになり年輩者には感慨深いものがあるようであった。

ベル教授の話でも、またその後の機会にもアメリカでは、East European Jew と German Jew が、はっきり使い分けられるのに気がついた。German Jew は文化的にも経済的にも East European Jew より優位にあったから、そのような区別がなされたのであろう。ドイツからオランダに逃がれたアンネ・フランク一家に代表されるような金持ちユダヤ人は、確かに東欧ユダヤ人には見られなかったようである。

CCNY（ニューヨーク市立大）は今でもそういうマイノリティーの人々に門戸を開放しており、ベトナム戦争の後、ベトナム人、韓国人、日本人、フィリピン人など特にアジア系の学生が急増しているという。

ダニエル・ベルの話から彼のいとこで、CCNY 創立以来の秀才と言われたティニー・コーンが戦前に、日本に移住、東京に初めてユダヤ人センターをつくったことが知れた。この事からもわかるように日本とユダヤの接触の歴史は非常に浅い。したがってアメリカにおいては常識に近いユダヤ人の諸習慣が、日

本では殆ど知られていない。例えばバーミツバ (bar mitzvah) という儀式である。これはユダヤ人が13歳になると迎えるユダヤ人としての自覚にめざめ、ユダヤ人として自立する決意を誓う生涯で最も重要な儀式といわれる。いわば日本の昔の元服と同じである。TV などの家族ドラマを見ていると、バーミツバがごく当り前に出て来て、日常生活に定着していることを思わせる。ユダヤ人の場合、男の子が生まれた場合、割礼がなされるのは良く知られているが、これは旧約聖書に出ているからわかる。バーミツバとはフブライ語で son of command の意味で、本来は戦士になるための儀式であったらしいが、現在はわが子のユダヤ人社会へのデビューを意味し、一族郎党を招待し、できるだけ盛大なものにすべく親は心を砕くようである。このバーミツバは毎年豪華なものになって行くようで、現今の日本人が結婚式に莫大な金を注ぎ込むのにどこか似ている。

この他 Passover (過ぎ越しの祭)、光の宴とも言われる Hanukah などの行事もアメリカ人にはなじみのもので、クリスマスの時にホワイトハウス前の広場に “Merry Christmas” と同列に並んで “Happy Hanukah” の大きな看板が立てられていたのを思い出す。この他コシャー (kosher) なるレストランも有って、ユダヤ人の掟 (タルマド) に従って料理したものを出す。コシャー料理はブランダイス大学はもとより、ハーバード大学にもあって、純粋ユダヤ人はその Cafeteria に食べに行っていた。このようにユダヤ人は、その戒律や習慣のために彼ら同士で、どうしてもかたまってしまう。シナゴグを中心にユダヤ人社会が形成され、彼らのいう pagan から敬遠されるようになる。アメリカのユダヤ人もすべてが、アイビーの大学を目指すわけではなく、金儲けや名声にとらわれないで、ふつうにという場合、ブランダイス大へ子供達を入れるようである。彼らにはこの大学が一番気がおけないということであろう。ブ大にはユダヤ人のサークルがいろいろある。ホロコースト研究会もその一つである。実際にナチスによるホロコーストを体験してきた人達が、サークルにやって来てその時の事を学生達に話して聞かせる。ホロコーストを単なる歴史的事実に終らせまいとする民族の決意が感じられた。学生達はなんともなんど

も繰り返し、ホロコーストを学習する。このようなことが、一般のアメリカ人に、少しく奇異にうつるのは確かである。

しかし若い学生達は、特に一般の学生達はそのような事実は映画やTVによってしか知らないの、更に詳しく知りたいと関心をもつ者の方が多いという。

たとえばハーバードではコア・カリキュラム(新しい一般教育のプログラム)の一つである social analysis の時間に “Explaining the Holocaust and the Phenomenon of Genocide” という講義が行われていた。Emerson Hall (哲学<sup>(2)</sup>学科の建物)の210番大教室は、Prof. Goldhagen のこの講義を聴きにくる学生達で毎回満員であった。彼自身ユダヤ人なのであるが、ユダヤ人の虐げられし歴史を白日の下に曝け出すという感じで、たんたんとした調子で講じて行く。スーザン・ソントグの『隠喩としての病い』も引き合いに出され、ユダヤ人が最初は「結核」として、近年は「ガン」として比喩されている現象を、具体例に則しながらアンチセミティズムの歴史を語る。1935年にドイツの小学生の書いた心胆を寒からしめる作文などが紹介されると、学生達の中から口笛がわきあがり、教室は一瞬騒然となった。マルクスの古典的な定義 “Anti-semitism is a socialism of fools” の説明の頃は、さめていた教室の雰囲気もだんだん熱気をおび、講義が終わると、一斉に拍手がわき起こる有様であった。このようなことは他の講義の時には見かけられなかった。配布されたプリントには ① “Nazi Sexual Demonology” by E. Goldhagen, *Midstream*, Vol. 27, No. 5 (May 1981), pp. 7-15, published by the Theodor Herzl Foundation, Inc. ② “Obsession and Realpolitik in the ‘Final Solution’” by Erich Goldhagen, in *Patterns of Prejudice*, Vol. 12, No. 1 (Jan.-Feb. ’78), published by Institute of Jewish Affairs.

があった。前者はいわゆる性的悪魔論という形でのホロコースト解釈で、ナチの精神風土を論じたものである。ユダヤ人が遺伝的に悪魔であることは科学の証明するところとするナチに論駁を加える。後者では最終解決の問題がテーマで、何がナチスをしてユダヤ人の絶滅へと駆り立てたかに関するゴールドハー

ゲン教授の見解が述べられている。講義のテーマはずっしりと重いものであるが、教授は時々ジョークもとばして学生を笑わせる。傑作は「精神分析学とは何か？」に対して「それはユダヤ教の一派である」という答えであった。フロイト以来、psychiatristはユダヤ人と相場が決まっているからである。この講義はホロコーストを知らぬ世代の学生達を啓蒙することにより、再びあのような悲劇を繰り返さぬよう訴えるものであった。ハーバードの地元の Bostonian たちのユダヤ人に対するイメージと、かつて多くのドイツ人が持っていた対ユダヤ人観がよく似ているという教授の言葉が私には特に印象に残った。

ユダヤ人大学のブランダイスの方は、「ホロコースト研究所」があって入手可能な限りの関係資料がすべて揃っていて、いつでも閲覧可能のためか、ホロコーストに関する特別な講義は行われていない。それは各教師の講義の中で自然な形でなされるようである。ゾーン教授の場合も学生達にドイツ文学を教えながら、ユダヤの歴史をも教えている。

今回のアメリカ体験で非常に新鮮な感じを受けたのは、ユダヤ人の幾人かが、最初の出会いの時に、フランクに“nice to meet you. I am a Jew”と言って握手を求めて来たことであった。かつてドイツに居た時、無意識的にユダヤ人に会ったことはあるかもしれないが、意識的に彼がユダヤ人であると知って接触したことは無かった。それも、現在ドイツには総人口の1%しかユダヤ人がいないことを考えれば、もっともな話で別に不思議ではない。それ故実際にユダヤ人とお茶を飲んだり、食事をしたり、話をしたりするのは私にとってこんどが初めての体験であった。それで自己紹介の時に「私はユダヤ人です」と名乗ったり、聞く方も当り前に「あなた、ユダヤ人ですか？」と聞いたりするのは少なからず驚いたのである。ドイツに居た時の感覚からすると、目の前の人に向かって「あなたはユダヤ人ですか」と尋ねにくい気持があった。それはドイツではユダヤ人というと、連鎖反応としてナチスのホロコーストがすぐに頭に浮かぶためである。ところがアメリカでは、このようなコンテクストが無いためか、前述のごとき会話も自然に、むしろ自分がユダヤ人であることの誇りを述べる面が強いようである。この点、戦後アメリカに渡ったドイツ系アメ

リカ人たちが特に危惧の念をもって見守っている。ユダヤ人の子供達は日曜日にシナゴグで行われる日曜学校には、何をさしおいても出かけるのであるが、そこでなされているのはエリート教育、徹底した選民教育であるという。旧約聖書に則して、ユダヤ人こそは神に選ばれた民というわけである。これを小さい時から徹底的に繰り返し教えこまれ、ユダヤ人としての誇りを植えつけられるという。

これはナチスの時代に、小学生やヒトラー・ユーゲンドが、ドイツ民族の優位を „Deutschland über alles“ といういわゆるドイツ民族至上主義という形で教え込まれたのと現象的には似ている。前述のドイツ系アメリカ人達はその事を心配しているのである。アメリカ・ユダヤ人はなんといっても力があるから、各界での活躍が目立つ。学界はもとより、財界には Rothschild をはじめ、そうそうたるユダヤ財閥があり、映画畑にはバーバラ・ストライサンド、ジェリー・ルイス、ダスティン・ホフマン、トニー・カーチス、フランシス・コッポラのような人気者が揃っている。これはやはり金のない一般庶民の妬みの対象にもなりやすい。マルクス以来、なお Judenproblem というものが、構造的には変化していないことを知らされた。私が知りあったユダヤ人は、ゾーン教授、ロソフスキー教授を始めとして、いずれも人格円満な非常に温たかい人々であったから、彼らの為にもこの問題の可及的速やかな解決を望みたいと思った。ユダヤ人が良きにつけ、悪しきにつけマスコミなどの話題になるのも、一般の人々の反感を呼ぶ一因にもなっているようである。彼らだけがなぜ特別扱いされるのかと。その上ユダヤ人たちがユダヤ人だけで結束してしまう傾向や、強力なユダヤ人のイメージが、それらの反感に更に拍車をかけるのである。昨年(1981)の10月に TV で、“The Wall” という、テレビ映画「ホロコースト」以来の、第2次大戦下のユダヤ人を扱った3時間に及ぶ映画が全国放映された。この前宣伝がものすごく、夏頃から CF で毎日のように流された。この「壁」というテレビ映画、そのうち日本にもお目見えすることと思われるが、内容的には別に新味なく、ワルソーゲッターの日常生活を描いたユダヤ人物語で、主人公が最後にナチスによって、蜂の巣のように射たれて死ぬという

筋であった。これがTVの宣伝だけでなく、雑誌を始め、新聞でもとりあげられ、放映日に照準を合わせて、まさに「壁」一色となり、「壁フィーバー」の如きものが出現した。偶々同じアパートで知り合ったポーランド人夫婦が、この現象をとらえて、なぜユダヤ人だけが同情され、特別扱いされるのかと憤慨した。彼らは4年前にポーランドから亡命して来た医者一家であった。夫のMは、労組「連帯」が出現する以前の活動家であったようで、身の危険が迫った為、新天地を求めて米国に亡命して来たのであった。妻の方は、穏やかな調子ながら、ユダヤ人が優遇されることに不快感を表明した。彼女の父はポーランド人だけれども、同じようにドイツ人に殺されたという。ギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』に出てくるダンツィヒ近郊に居住していたカシューペー人(Kaschube)なども、ほぼ絶滅する位に殺されてしまっている。そういう例もあるのにポーランドで、死んだり悲惨な目にあったのがすべてユダヤ人のごとく扱われるのはおかしいではないかと言うのである。夫の方はもっとラディカルで、ちょっと信じられぬ位であった。医者をやっていた位であるからポーランドでもインテリ層に属した筈の人である。20年前に既に自動車を買ひ、パリに行ったり、イタリーにも旅行しているというから、経済的にも恵まれていたらしい。ポーランドではエリートだったと言って良からう。その人が、ポーランドであのようにユダヤ人が殺されたのは、間違っていない、正しい行為だったと言うのである。瞬間、私は啞然として言葉も無かった。圧政に対して、自分自身、抵抗して来た本人が、このようなことを平気で言うのである。やはりポーランドでも、彼のような存在がユダヤ人殺害を許容してしまったと言えるであろう。この医者はユダヤ人は<sup>ばい</sup>菌であるとかたくなに主張し続けた。偏見とは恐ろしいものである。

もう一つアメリカ・ユダヤ人の特徴として、犯罪にかかわる例が非常に少ないことが挙げられる。NY市にはアメリカユダヤ人の大部分が住んでいると言われるが、ユダヤ系ニューヨーク市民の殺人事件は殆ど無きに等しい。ニューヨークと言うと暴力・殺人が日常茶飯事のようなのであるが、ユダヤ人社会に犯罪が無いのは戒律の厳しさのためらしい。それは旧約聖書の掟通りに「目には目

を、齒には齒を」を実行して来た結果であるという。何か悪いことをした時にはユダヤ人の恥になるような事をするなど、仲間うちで制裁を加えていたらしい。そういう伝統がNYには今も残っているようである。

## アメリカにおけるドイツ

扱てこんどは、ユダヤ問題からアメリカにおけるドイツに目を転じてみたい。1623年にイギリスの清教徒達がコッド岬に漂着して以来約360年、この間に世界各地からあらゆる民族が新天地を求めてアメリカに移住して来たのは周知の事実である。その中で最も多くの移民を送り出した国はイギリスやフランスではなく意外やドイツなのである。現存の人々には近年の「ヒトラーのドイツ」の印象が強く残っているため、ドイツ人は排他的且つ国家主義的、いわゆる *nationalistisch* と受けとられるのが一般である。その観点からすればドイツが最大の移民国家という事実はにわかに信じ難いことであろう。しかし他方では過去300年の間に彼等がすっかりアメリカに同化し、その一部分になりきってしまったという事実が厳然として存在する。確かにニューヨークの一部とか、ウイスコンシン、ミネソタ州、それにフィラデルフィアなどにはペンシルヴァニア・ダッチの名で呼ばれるドイツ系の人々がかたまっている例もあるが多くはすっかりアメリカ全土に散ってしまったのである。この点イタリア系、ポーランド系、ユダヤ系、中国系の人々が各地に彼らの祖界をつくって住んでいるのとは随分異なる。イギリス人は別格として、ドイツ移民が最もアメリカに同化し、自分達のアメリカをつくりだそうと努めたらしい。その過程で、先のペンシルヴァニア・ダッチなどは例外として、ドイツ文化は消え去ってしまったのである。したがってドイツ語に通じている者にはすぐにわかるドイツ系の姓なども、その名を持っている本人自身がその事を知らない場合が多く、これには吃驚した。また移民としてアメリカに入国した当時に英語系の名前に変更したり、英語に翻訳したりした例も多いという。(z. B. Sohn→Zohn, Schneeberger→Snowberger, Battenberg→Mountbatten)。またもとはドイツ名であっても自然に英語式に発音されるようになり、すっかりアメリカにとけ



込んでしまった例もある。今のニューヨーク市長は Koch 氏であるが、コッホではなくミスター・コッチである。ウォーターゲート事件で失脚したニクソンの腹心アーリックマン (Ehrlichmann) と言っても発音された限りでは無意味であるが、ドイツ語で honest man の意味だということ、びっくりして笑い出すのである。祖先がドイツから来たと知っているドイツ系アメリカ人は今や少数派であり、大部分はもともとアメリカ人であると思っているそうである。それほどアメリカ化している。というよりはむしろアメリカという国において既に目立たない空気の如き存在になっているということであろう。例えばアメリカ人が国民食のごとくに思っているハンバーガー・ステーキが、Hamburg のひき肉料理フリカデレ (Frikadelle) に由来していること、また一番飲まれているアルコール飲料がビールであることを考えれば、ドイツ原産の飲食物が今のアメリカ人に欠かせないものになっていることが、よくわかる。また我々の年代にはなつかしい女優兼歌手ドリス・デイは、戦後映画に舞台に活躍し、ヤンキー娘の典型のように思われたものであるが、彼女も出身はドイツなのである。本名は Doris von Kappelhof という。たまたま “Day After Day” を歌っている彼女の演技に注目したマネージャーのすすめによって Day という芸名に改名したそうである。のちに “Götterdämmerung” (神々の黄昏) を歌っている時でなくて良かった」と述べている。ちなみに彼女の父は音楽教師であった。

要するにドイツ本国では nationalistisch などころがあったドイツ人も、アメリカではアメリカに一番とけ込んでいるという事実がある。これはヒトラーのユダヤ人虐殺以前の歴史において、ユダヤ人を最も多く受け入れた国がドイツであるという事実と通じるものがある。このことはピーター・ゲイの『ヴァイマル文化』の冒頭の一節を思い出させる。「本当のところドイツには二つの姿がある。一つは軍事的に威張りちらし、権威には弱くペコペコ頭を下げ、外国には侵略的で何事も形式にとらわれるドイツである。もう一つは叙情詩と人道的哲学と平和的な世界主義のドイツである……。」この後者のドイツ像がアメリカの新天地ではかなりの程度で発揮されたといえよう。もともとドイツ人

には国民性として「自由」と「遠隔の地」にあこがれる傾向があり、海外移住は一種のドイツ人の夢であつたらしい。ドイツ本国で行き詰まると、それが政治的にであれ、宗教的にであれ、経済的にであれ、人々は新世界を求めて脱出したそうである。この点が移民という現象を殆ど知らないフランス人と異なる。またイギリスの場合は植民地国家であつたから、インドやカナダなどの海外植民地に出かけることは自国領土への移住を意味するだけで海外移民とはならなかった。アメリカの作家リチャード・オコナーは『ドイツ系アメリカ人』の中で、ドイツ人はいつの時代にも移動欲に支配される国民であつたと言っている。たとえば彼等の祖先のチュートン族は一カ所にとどまることを知らぬ種族であつたし、遠方への衝動はドイツ人にとっては他のどの諸国民より強いものがあつたという。

この遠方というのは三百年にわたって具体的には北アメリカを意味した。今年は最初のドイツ人がアメリカに移民してから丁度300年となり、米独両国の郵政省より記念切手が発行されることになっている。記録によると1683年にペンシルヴァニア州にジャーマンタウンが建設された。そして彼らがすぐに始めたのがビールの製造であつたという。それ以来ドイツからの移民は量に差はあつても途切れることなく続いており、18世紀にかなり大量の移民があつた後、19世紀にそれはピークに達したようである。記録によると1854年には約215,000人が、1882年には250,000人がアメリカに移住したとある。そして現在までに約1,000万人のドイツ人がアメリカに渡り、特に中西部アメリカ人の中核となっているという。

ドイツ人は新大陸に勤勉さと体育館をもたらし、車輪の幅の広い典型的なPlanwagen（幌馬車）を発明して、西部への開拓を可能にした。Kindergarten（幼稚園）が英語になっているのはその創案者がドイツの教育学者フレーベルであることからというのは良く知られている。余り知られていないのは体育館のことである。ドイツ体操の父ヤーン（1778-1852）の考えがそのまま持込まれ、その結果全国中の学校に体育館が建設されるようになった。それまでの体操授業はイギリス式教育の下にあって、野外で行われるのが常であつた。学校

の校舎に体育館を結合するという考えは今でこそ当たり前になっているが、当時としては革新的であった。

ちなみに過去の歴史の中に現われた著名なドイツ系アメリカ人には、独立戦争で活躍した女傑 Molly Pitcher (ドイツ名 Maria Ludwig), 1733 年にアメリカに移民した現在のロックフェラー財閥の始祖 Johan Peter Rockfeller, 野球の Babe Ruth (ドイツ名 Georg Herman Erhardt), 初代のターザン俳優 Johnny Weissmüller, ノーベル賞作家の John Steinbeck 等があり、現在ではレーガン政権の国務長官 George Schulz や前述の Doris Day 等がいる。ドイツからの移住者とその子孫達はすっかりアメリカ社会に溶け込んでしまった為、ethnische Gruppe としては既に長いこと識別がつかなくなってしまった。この点がイタリア人やラテン系アメリカ人と違うところである。

19世紀はドイツ移民が最も多かったこともあって、アメリカにおける対独関心も最も高まったという。当時アメリカの知識人にはドイツに留学する者が多かった。そんなことから1848年の革命は、連帯を表明する者も出るほどの関心を集めた。その頃の流行語に「49年組」(forty-niner)と言う言葉がある。フォーティ・ナイナーという、一般には1849年のゴールドラッシュでカリフォルニアに押し寄せた人々を指す言葉として知られているが、エマソンやロングフェローが使うフォーティ・ナイナーはドイツ移民組の方である。当時ロングフェローはハーバード大学でドイツ語を教えていた。エマソンは「神学校演説」がたたって、ハーバード大学より追放中の身であったが、ドイツの哲学を勉強していた。なぜ「49年組」が生まれたかという、前年の48年の革命の挫折、更にフランクフルト国民議会の失敗に、夢を破られた人々が、翌年自由の新天地アメリカに向けて船出した為である。一種の移民ブームであった。彼等も移民したての頃はドイツ文化との関わりを保っていた。この時の移民は政治的理由からの者が多かったので、町長とか村長などのいわゆるインテリ層が主体であった。

この頃ロングフェローはハーバード大学のドイツ語科の教授として、ゲーテの“Wandrer's Nachtlied”を英訳し、その名訳を後世に残した。ロングフェ

ローのゲートに対する心酔はたいへんなもので、今でもハーバードのすぐ近くにある「ロングフェロー・ハウス」にはゲートの使ったというコーヒー・カップが展示されている。エマソンを中心とする transcendentalist 達が、ドイツに関心を向けた事は、エマソンの「夜は神秘哲学とわがドイツのための時間」という言に代表されている。

エマソンの独立の精神は、「49年組」の人々にも自由、平等、平和、博愛思想の生かされたものとして、彼らがアメリカ社会にとけこむ際の支柱となった。

アメリカ歴史上、最も高揚したドイツ熱も、前世紀末には衰退し始めた。これはアメリカの国力が充実し、いわゆるアメリカ固有の機械文明が隆盛をきわめ始めたのと軌を一にしている。しかし第一次大戦まではまだドイツ文化に対する尊敬の念というものがあったという。しかし二つの世界大戦がそれらをすっかり消し去ってしまった。第一次大戦でアンチ・ジャーマンの気配が芽生え、第二次大戦でアメリカ人はすっかりドイツ嫌いに転じたという。その背景にはドイツ系移民が、すっかりアメリカ人に変質しており、日系米人と違って、母国とのつながりが消失しており、ドイツに対して祖先の国というような意識が乏しかったこととも関連する。したがって日系米人に見られた祖国日本と米国の板狭みになるというようなことが見られなかった。欧州戦線の連合国総司令官アイゼンハワーは、敵国ドイツ側から見れば、その名が一目瞭然ドイツ系とわかるものの、アメリカ本国では典型的なアメリカ軍人として信望を集めていたのである。また第二次大戦中、カリフォルニア地方の日系人が強制収容所に入れられた事件は、日本ではその事実のみが指摘され人種差別であったとされるが、これもその背景を考えると必ずしもそうとはいえないのである。一つには日本の真珠湾奇襲があり、またその時点での日本の米国移民史はわずか70年には満たず、各地に日本人社会が形成されアメリカに完全にはアシミレートしてはいなかった。一方ドイツの場合は既に300年にわたる移民の歴史の蓄積があったのであり、すっかりアメリカ化しており、行政府がドイツ系アメリカ人を識別することはもはや困難になっていた。したがって同じ敵国とは言っ

でも一概に同レベルでは論じられないのである。アイゼンハワーやライシャワーをその姓名の故に強制収容所へ入れることなど不可能であったであろうし、もしそのような企てを遂行する場合には数千万人規模の収容所が必要とされたであろう。それほどドイツ人はアメリカ人になっていたということである。

第二次大戦におけるヒトラーの非人道的行為は、一般アメリカ人の感情的反ドイツ気運を生み、それが戦後も今も尾をひいているようである。現今の状況は反ドイツ気運というよりも、対独無関心というのが当たっている。それは DAAD（ドイツ学術交換協会）の留学生募集に応募者が集まらないという事実にも現われている。日本では DAAD の試験に応募者がつめかけ、詮衡するのにたいへんというのとだいぶ異なる。その為アメリカの場合、ドイツ語専攻の学生でなくても、またドイツ語ができなくても、ドイツに興味をもっている者ならば、応募が可となっている。要するに英語だけ喋ればそれだけで結構と大幅な譲歩をしている。これには私自身ドイツ語教師として大いに失望した。日本の場合、文部省の規定とはいえ、大学生は第2外国語を学習することになっており、ドイツ語学習者数は、数からいえば第1外国語の英語に次いでいる。

向うで知り合ったドイツ人達は、アメリカはアメリカなりに自分の文化をつくってきたから、日本も将来はそうなるのではないかと慰めにもつかぬことを言った。つまり日本もそのうちにドイツに対する関心など持たなくなるであろうというのであった。確かにここ数年の日本の右傾化、国粹的気運の昂まりを見ているとあながちありえないことではないと思われ、少し不安になった。確かに最近の学生達には以前ほどドイツに対する関心は見られなくなった。ドイツ語を学習するのただ卒業の単位に必要なからという消的極理由によるものが大部分と言って良からう。この傾向は文部省の英語一本化への姿勢と連動しているともいえる。かつて私が勤務していた独協学園は、ドイツ語を中学校から教えている日本で唯一の学校であるが、私の頃は中学ドイツ語クラスは1クラス60名という多人数であった。それが今年のドイツ語クラスはわずか13名に

減ってしまい、高校は昔は新たに1クラスの編成ができたのに、今年はドイツ語志望の入学者が5名しかいなかったという。中等教育段階でのドイツ語教育は早晩消え去る運命にあるのであろうか。かつての蘭学が今や日本から殆ど姿を消した例のようにならなければ幸いである。

## アメリカにおけるドイツ文学の現況

現在の平均的アメリカ人にはドイツに対する関心が殆ど無いこと、そしてその背景については既に詳しく説明した。しかしこのこととドイツ文学研究の水準とは関係がない。むしろドイツ文学、ドイツ語学、ドイツ関連諸学に関係する人達、つまりゲルマニスティクを専門にしている人々の研究活動は非常に活発で、その研究業績も水準の高いものが少なくない。何よりもドイツ本国の研究傾向に追随することなく、独自の視点から自分達の研究を進めているのが特徴である。これは外国におけるドイツ文学 (Germanistik) の可能性を考える場合、大いに参考になる。何か新しい視点を打ち出すこと、これは特に外国における外国文学研究者に求められる重要な研究態度である。もしも「外国人が Germanistik をやることの意義は何か？」という根源的な問いとの対決を迫られる場合、そこにドイツ本国とは違う研究視点が出てくるのは当然といえるのではなからうか。アメリカの大学でドイツ文学研究者の養成を目的とする大学は、前述の一般レベルでの対ドイツ無関心と相まって、東部のアイビー・リーグを中心とするいわゆる昔からの伝統ある名門大学に限られている。したがってアメリカのドイツ文学研究者の数は「日本独文学会」のような全国組織がないため、定かでないが、日本に比べればはるかに少ないようである。もっとも日本のドイツ文学研究者の数は約3,000名(独文学会の会員数)で、これはドイツの大学の Germanist の数をはるかにしのぐものである。日本は数の上では世界一である。アメリカは数は少ないものの、研究活動の方は盛んである。Euphorion や DVjs のような研究誌に最も多く寄稿している外国人はアメリカ人であることを見ればそのことがわかる。

大学の独文科では、日本同様ゲーテ、シラーの古典なども勿論行われている

が、その一方で大衆文学的なもの、文化史的なもの、思想史的なものなど幅広く行われているのが特徴である。最近の傾向としてワイマール文化に対する関心の高まりを挙げることができる。ハーバードではコア・コースの一つとして M. Tatar 教授の “Weimar Culture” が、ブランダイス大学では Zohn 教授の “The Culture of the Weimar Republic” が一般教育の科目として設けられている。講義目録の中からゾーン教授のものを参考として転記してみたい。

The focal point of this course will be Berlin in the troubled but fecund decade-and-a-half between the end of World War I and the accession of the Hitler regime. The course will explore many aspects of the culture of the time, including literature and music (both serious and popular), art and architecture (Grosz and Gropius), the Neue Sachlichkeit (new sobriety) in its various manifestations, the theatre of Max Reinhardt and Erwin Piscator, the musical theatre of Bert Brecht and Kurt Weill, the satire of Kurt Tucholsky and Erich Kaestner, and the famed cabarets of Berlin. Lectures, discussions, and readings in English, but those with advanced preparation in German will be expected to do some of the reading in the original.

また純然たるドイツ文学研究の分野では、ロココの復権と、ユダヤ、ドイツ両文化の共生 (Deutsch-Jüdische Kultursymbiose) としての文学が前面に押し出されているのが目立つ。前者は Christoph Martin Wieland (1733-1813) に対する正当な評価の試みと言ってよい。ヴィーラントは従来、ゲーテ等の古典主義文学の前座的存在としてのみ扱われ、独立して扱われることがなかった。特にグンドルフの『ゲーテ』の影響のため、偉大なるゲーテの前に同格文学者の存在というものは認められなかった。その上ブーシェが描くところのフランス宮廷のロココ生活用式に代表されるような優雅さ、軽妙さ、滑稽<sup>けい</sup>さを作品の中に具象化したヴィーラントの一面のみが表面に出てしまい、フィールデ

ィングやスターンの『トリストラム・シャンディ』などに学んだ小説技法や教養などの隠れた面ののぞかれることが少なかった。アメリカのドイツ文学者達はこの面をも斟酌した上で、ヴィーラントのもつ面白さに注目している。フリードリヒ・ゼングレの『ヴィーラント』を学んだ弟子達、Jobst Hermand (Univ. Wisconsin), Frank Trommler (Univ. Pennsylvania), Walter Hinderer (Princeton) 等が、ロココ文学を以上のコンテキストで講じているが、他に Craig や Bach の次の著書も興味深い。

M. G. Bach : *Wieland's Attitude toward Woman and her cultural and social Relations*, New York, 1966.

Charlotte Craig : *C. M. Wieland as the originator of the modern travesty*.

それからもう一つの特徴であるユダヤ文化とドイツ文化の共生の観点から眺めたドイツ文学については、東欧ユダヤ人の生み出したイディッシュ文学も広い意味ではこの範疇に入るのであるが、イディッシュ語については既に触れたので省略する。ここではユダヤ人の書いたドイツ文学の研究がテーマである。アメリカはこの点で地の理を得ている。ドイツ本国の環境にはユダヤ側面からの研究に伴う困難な条件が少なくなく、むしろ在外研究者の方が進めやすいという点があるからである。アメリカにはドイツにおける屈折した対ユダヤ人感覚はない。

もっともドイツ人のこの感覚もヒトラーの犯罪以後にめばえたもので、それ以前はドイツ人の側にもユダヤ人の側にもそのような屈折した違和感はなかったようである。たとえばヨーゼフ・ロートのシュテファン・ツヴァイクにあてた手紙（1933年3月）の一節はこの事を象徴的に物語っている。「われわれの祖先はアブラハム、イサク、ヤコブである以上に、ゲーテ、レッシング、ヘルダーなのです。われわれはエジプトからよりも18世紀ドイツの解放とフマニテートから出て来たのです」とある。同様なことをエルンスト・ブロッホも後年語った。ブロッホも子供の頃はもとより、ヒトラーがユダヤ人、ユダヤ人と騒ぎ立てるまでは、自分がドイツ人だと思っており、ユダヤ人とはっきり意識し



たことは無かったという。

特に Dreivölkerstadt（三民族都市）と言われたブラハの場合、むしろ民族意識を越えたコスモポリタンの雰囲気支配していたようである。ユダヤ系とブラハ生まれというのはドイツ現代文学における一つの現象であった。表現主義の文学もユダヤ系の詩人の多いのが一つの特徴といえよう。『あらし』主幹のヴァルデン、エルゼ・ラスカー＝シュラー、ヴェルフェル、トラー等はユダヤ系であり、ヴェルフェルもカフカもリルケもブラハ生まれであり、更にカフカの友人マックス・ブロート、『賢人ナータン』を演ずるために生まれて来たといわれる名優エルンスト・ドイッチュ、ワイマール時代に活躍するヴィリー・ハースも同様であって19世紀の70年代、80年代にブラハで生まれた者のなかからすぐれた文学者が多数輩出したことは特筆に値する。このうちリルケを除けばみなユダヤ系ドイツ人である。彼等はユダヤの側からみるとアシュケナジム（ドイツ・東欧系ユダヤ人）と言われ、セファルディム（スペイン・西欧系ユダヤ人）とは区別される。アシュケナジウムの中から、カフカやカール・クラウスのようなドイツ語の散文の名手が現われたことは、言語を考察する際に、我々の目を「環境と言語との関係」に向けさせるのである。

カール・クラウスは、彼の主宰する『ファッケル(たいまつ)』誌上で、後にアドルノによって「言語の観相学」と呼ばれる、いわゆる言語批判を十年間以上も続けた。言語の荒廃はクラウスにとって現実社会の荒廃と同義であったからである。彼の言語批判は日常言語の中でも、とりわけジャーナリズムの文法違反を多面的に問題にしている。これらの言語批判がヴィトゲンシュタインに強い感銘を与えたことは周知の事実である。言語学者フリッツ・マウトナーが、そもそも言語とは何かを考える契機となったのも、クラウスやカフカの存在と関係がある。それはマウトナーがワイマール文化の中で欠かせぬ「マウシェルン」に注目し、マウシェルンの地域のユダヤ人の中から、カフカやクラウスといった特別な言語の形成者が出たのは何故かを解明しようとしたからである。マウシェルマンとは主として東欧・中欧のユダヤ人が話す混じり気のある、程度の低いと思われたドイツ語のことである。しかしこのマウシェルンも

その母体であった存在が消滅した今となつては、聞くすべがない。ゾーン教授とワイマル文化の社会的背景について話している時、マウシュェルンが話題になった。私は文献の中でしばしば目にするので、マウシュェルンという概念はわかるが、その実体となるとわからない旨を述べた。そしてマウシュェルンの喋り方を演って見せては貰えぬかという私の願いをゾーン教授は快く聞き届けてくれた。ゾーン教授が吹き込んだ録音テープから、そのまま筆を起こしたものを下に掲げる。これは貴重な音の記録である。ここでは音の伴わぬのが残念であるが、マウシュェルンについて、またマウシュェルンによるドイツ語がいかなる物かを知るのに参考になると思う。

Unter mauscheln versteht man Deutschsprechen mit starkem jiddischem Einschlag. Die Antisemiten gebrauchen den Ausdruck natürlich in abwertender, abschätziger Weise. Daß ein Jude, der z. B. also keine guten Manieren hat—der aus dem Getto kommt—nicht gut Deutsch gelernt hat—die deutsche Sprache verhunzt, mißbraucht... nicht (wahr). Manchmal gebrauchen sogar jüdische Schriftsteller wie Karl Kraus und Kurt Tucholsky und Theodor Herzl dieses Wort in parodistischem Sinne...nicht (wahr). Also ein Mauschel ist jemand, der ein frappant jüdischer Typ ist (und so wie man sich einen Juden vorstellt)—der mit den Händen redet—der ungrammatisch spricht. Also ich werde versuchen... Es ist nicht dasselbe wie Jiddisch. Jiddisch ist ja eine ernst zu nehmende Sprache mit Grammatik und mit einer sehr großen Literatur im 19. und 20. Jahrhundert. Aber das Mauscheln bezieht sich auf Deutschsprechen. Es kommt von Moshe, Maushe, der typische jüdische Name—... also mauscheln ist auf jüdische Art Deutsch sprechen. Ich werde versuchen einige Sätze auf diese Weise zu sprechen.

„Gestern bin ich gekommen zu meinen Freund und da hat er mir gesagt ich soll bleiben bei ihm. Ich aber hab nicht gewollt bleiben bei ihm weil er hat mir gesagt er hat nicht genug Essen für mich— wozu soll ich ja nicht gut essen und nicht gut schlafen, hab doch zu Haus daheim, daheim hab ich doch mein eigene Wohnung, kann doch wohnen bei mir, und kann doch schlofen bei mir.“

Ich kenne einen antisemitischen Verfasser einer Literaturgeschichte, der gesagt hat, Heines Gedicht die Lorelei: „Ich weiß nicht was soll es bedeuten“ statt „Ich weiß nicht was es bedeuten soll“, daß das gemauschelt ist. Er hat gesagt das ist mehr Jiddisch. „Ich weiß nit was soll es bedeuten“. Das ist gemauschelt. Man red so halb jiddisch, halb deutsch und jiddisches Deutsch halt, das ist gemauschelt.

(Über „mauscheln“ von Prof. Harry Zohn, Brandeis University)

ユダヤ文化とドイツ文化の共生の問題は、混合文化の多産性ならびに寛容性を論じる場合、今後ますます重要な研究課題となろう。昨年惜しくも死去した N. ゴールドマン (1894-1982) は、リベラル派のユダヤ人として、全世界のユダヤ人から絶大な信頼を受け、世界ユダヤ人会議会長を勤めていたのであるが、その彼が、自伝『ユダヤ人且ドイツ人としての私の生涯』の中で次のように語っている。「我々にとってヨーロッパ文化とは、レッシングとシラー、カントとヘーゲル、ゲーテとハイネのことである。つまりラシーヌやモリエール、シェイクスピアやミルトン、バスキアやロクではないのである」と。この言明は英仏系のユダヤ人を怒らせたのであるが、しかしマルクス、フロイト、アインシュタインがなぜドイツ圏に生まれてフランスに現われなかったかという事実には、やはりドイツ文化とユダヤ文化の共生の問題が包含されていると思われる。

現在ではユダヤ文化とアメリカ文化の共生が顕著である。文学畑ではノーマ

ン・メーラー、ソール・ペロー、マラマッド、シンガー、シンシア・オジック、サリンジャー、スーザン・ソントグラが居り、哲学思想界でもソール・クリプケ、ロバート・ノジック、チョムスキー等が活躍している。

## ハーバード大学独文科

最後にハーバード大学の独文科ならびにドイツ関係の蔵書、施設などについて簡単に紹介しておきたい。ドイツ文学科のスタッフは教授4名、準教授1名、助教授2名、専任講師1名、語学教師3名の総勢11名で、下記の通りである。

*Faculty of the Department of Germanic Languages and Literatures*

Eckehard Simon, *Professor of German (Chairman)*

Frederick Amrine, *Assistant Professor of German*

Ute. T. Brandes, *Instructor in German*

Dorrit Cohn, *Professor of German*

Ann Clark Fehn, *Associate Professor of German*

Gail E. Finney, *Assistant Professor of German*

Margret Guillemin, *Preceptor in German*

Karl S. Guthke, *Kuno Francke Professor of German Art and Culture*

Lutcavage *Preceptor in German (Coordinator of Language Instruction)*

Ulrike Rettig, *Preceptor in German*

Maris M. Tatar, *Professor of German (Head Tutor)*

ハーバードは大学院大学のため、ドイツ語専攻の学部学生は18名であるが、大学院生は昨年度は総数19名であった。ドイツ語専攻の学生数はたしかに少ないものの、いざ専攻した学生は猛烈に勉強するので、ドイツ語が良くできる。学部の学生の授業もドイツ語原典をもとに、原則としてドイツ語で行われる。この点哲学科の学生がドイツ語ができず、大学院のカント・ゼミでも『純粹理

性批判』を英訳テキストでやっている（プリンストン大学でも事情は同じ）のとは異なる。アメリカで分析哲学が盛んなのは、勿論彼らの論理実証主義的思考傾向がそれに向いていることが主因ではあろうが、その他にも彼らが語学ができないこととも大いに関連がある。今回のアメリカ留学でそのことが判明した。分析哲学やプラグマティズムなら自国語で済むというわけである。むしろカント、ヘーゲル、ヴィトゲンシュタインが原書で読まれるのは独文科の方である。F. Amrine 助教授が、その任にあたっている。

ハーバード大学の自慢はドイツ本国にも無い稀覯本や豊富な資料、雑誌などが大学図書館に完備していることである。ワイドナー・ライブラリーの名で呼ばれるハーバード大学総合図書館は蔵書数 1,100 万冊を誇り、世界最大の大学図書館といわれる。(cf. わが国の国会図書館蔵書数 380 万冊)。なにしろ戦争が無かったため戦災にあうこともなく 300 年にわたって蔵書がそのまま蓄積されて来たのである。ドイツ関係の書物は『ドイツ文学目録』2 巻に網羅されている。

Harvard University Library : German Literature. Widener Library Shelflists. Classification Schedules. Classified Listings by Call Number, Chronological Listings, Author and Title Listings. 2 Vols. 1974. (Harvard U. P., Cambridge, Mass.)

この本は市販されているので、日本でもどんな本が所蔵されているかはわかるのであるが、しかしワイドナー・ライブラリーの 10 階建の迷路のような書棚を眺め歩きながら、ああこんな本もあったのかと自分で発見していく喜びは格別であった。ワイドナー図書館は開架式で、自由に閲覧ができたので、時には一日中薄暗い書庫の中で過ごしてしまうこともあった。そんな折、ドイツ本国には原本は 1 冊も残っていないと言われる „Dichtung und Volkstum” (『詩と民族性』) の現物が揃っているのを発見し興奮した。これはナチスの時代に文学研究誌 „Euphorion” 『オイフォリオン』が改名したものである。この『ディヒトゥング・ウント・フォルクストゥム』(Dichtung und Volkstum. Neue Folge des Euphorion. Zeitschrift für Literaturgeschichte) は 1934~1944 年

までの10年間続き、ドイツ精神、ゲルマン的北方性を鼓吹するナチの政治的イデオロギーに加担した。ナチの「非ドイツ的」精神を公共の書庫や個人の蔵書から追放するキャンペーンの展開にあわせて、『オイフォリン』も改名したのであるが、その改名の由来を、1934年の1. Heft の巻頭言で、新発行人となった Julius Petersen と Hermann Pongs が次のように述べている。

An unsere Leser!

Mit dem neuen Jahrgang tritt die Zeitschrift Euphorion in ein neues Verhältnis zu den wissenschaftlichen Bildungsfragen und zum Geist der Forschung ein. Sie gibt den Namen „Euphorion“ auf und damit die überbetonte Abhängigkeit deutscher Bildung von humanistischer Gelehrsamkeit. Der neue Name „Dichtung und Volkstum“ will zum Ausdruck bringen, daß auch die Wissenschaft von der Dichtung immer das Volkstum im Auge halten wird als den Grundwert, der alle ästhetischen, literarhistorischen, geistesgeschichtlichen Werte trägt und nährt. . . .

周知の反ユダヤ主義のみならず、広くギリシャ・ローマの人文主義的伝統までが、ナチスの文化政策の中で、非ドイツ的精神のカテゴリーに組み込まれていたことが、この巻頭言から読みとれる。この改名第1巻に掲載された主だった論文を次に挙げてみよう。

1. Rassenkunde, Volkskunde, Stammeskunde, Von Josef Nadler
2. Die Sehnsucht nach dem Dritten Reich in deutscher Sage und Dichtung.

I. II.

Von Julius Petersen

3. Krieg als Volksschicksal im deutschen Schrifttum. I. II.

Von Hermann Pongs

4. Schicksal und Sendung des Auslandsdeutschtums.

Von Henrich Zillick

5. Lebensfragen des sudetendeutschen Schrifttums.

Von Herbert Cysarz

6. Mundart, Hochsprache und Fremdsprache im siebenbürgisch-deutschen

## 7. Schillers Schwabentum.

Von Hermann Binder

これらを見ると、当時のドイツ文学界の傾向が大体わかれようというものである。同じ号に „Oskar Walzel zum 70. Geburtstag am 28. Oktober 1934 “ という Beilage が付いているのも注目に値する。当時独文学界の大御所であったオスカー・ヴァルツェルの古希の祝いにドイツ圏の学者研究者総勢 206 名が名を連ねている。まさに翼賛文学報国会の趣きがある。

Otto Behagel, Gießen; Karl Bühler, Wien; Herbert Cysarz, Prag; Ricarda Huch, Freiburg i. Br.; Paul Merker, Breslau; Josef Nadler, Baden b. Wien; Hans Naumann, Bonn; Fritz Neubert, Breslau; Julius Petersen, Berlin; Hermann Pongs, Stuttgart; Fritz Strich, Bern; Carl Viëtor, Gießen 等大家に混じって、若き日の Benno von Wiese, Erlangen も顔を出している。恋人ハナ・アーレントを見捨てた当時のヴィーゼの姿が彷彿として、文学者<sup>(3)</sup>と政治の問題を考える上で興味深い。

この他ハーバード大学にはドイツ関係の施設として「ブッシュ＝ライジנגー美術館」がある。これは第二次大戦前まではジャーマン・ミュージアムと呼ばれていたのであるが、戦争になってから改名されたという。この美術館には表現主義の画家を中心に、ドイツ中世以来の美術作品が豊富に展示されている。アルフレッド・クービンやジグフリート・レントの『国語の時間』のモデルになったエミール・ノルデの絵も数点展示されていた。ノルデは、ナチ時代に Malverbot を受けた画家である。この美術館の右側面の壁面には大きなライオンの頭部が半分浮き出た形（レリーフ）で彫られてあり、そのすぐ上にカントの DU KANNST DENN DU SOLLST（汝なすべきが故になし能う）が、刻まれている。しかし大部分の学生には、その意味もわからず、たとえドイツ語の意味がわかって、誰の哲学を言い表わしたものかは知るひともいない。

ハーバードの一般学生の中で、外国語を学ぶ必要のある者（高校時代習得の外国語単位が認められなかった者あるいは全然外国語を習って来なかった者など日本人の場合日本語がそのまま外国語として認められる、外国系アメリカ

人の場合も同様)は殆ど80%近くの者がスペイン語を選んでおり、ドイツ語を選択する者はごく少ない。ドイツ語は難かしいので、アメリカ人に易しいスペイン語にどうしても学生が流れてしまうとドイツ語教師陣が嘆いていた。この事情は外国語の習得を必須にしている大学に共通している傾向とのこと。ただしスペイン語を選択する学生達は、日本の一般教育の外国語と同じに、単位のために仕方なくとるという者が多いが、ドイツ語の場合にはそれが余り見られない。1週4時間(毎日1時間)の授業で、1クラス最大15名という小人数の教育で徹底的な実践教育がなされていた。最初からできるだけドイツ語を使って授業をするため、最初のうちは会話が成り立たないが、教師はあきらめずに辛抱強く繰り返す。とにかく教授の仕方がうまい。どんどん連想的に発問していく。教科書は Houghton Mifflin 社(ボストン)の“Deutsch heute. Grundstufe”という部厚な立派なもの(日本のペラペラの薄い文法乃至読本教科書が恥ずかしくなる位のもの)を用い、1年間で終えるのであるが、終わる頃には日常会話はもとより、かなり高度なことまで表現することができるようになる。しかしなんとといってもこれらの学生は少数派なので、ドイツ語を知っている学生は大学院レベルまで含めて全体的に見るとごくごく少ない。ハーバード大学の学部段階は The Faculty of Arts and Sciences の1学部のみで実質は教養学部であるから、ここを卒業して学生は大学院レベルのロースクール、ビジネススクール、メディカルスクールなどへ進学する。したがってそれらのエリートスクールに入学するのに如何に効率よく勉強するかのみに関心があって、語学など眼中にないという有様である。こつこつ苦勞して辞書を引くなど自分にはとてもできないと広言する学生も居た。外国語選択の人気度はハーバードの場合、①スペイン語②フランス語③ドイツ語④イタリア語の順で、ギリシャ語、ラテン語を習う学生は今や皆無に近い。ハーバードが神学校として出発したことを思うとまさに今昔の感がある。ハーバード大学の校歌はラテン語<sup>(4)</sup>であるが、ラテン語の雰囲気はもはや身の廻りにないので学寮で歌うこともなく、ただ毎年6月の Commencement(卒業式)で歌われるだけとなってしまった。式次第の終わりの部分に校歌の歌詞が印刷され、参列者をそれを見



ながら歌うか、棒暗記のまま歌うかどうかであった。私も参列したコマンズメントでは、元駐ソ大使で IBM 会長のトム・ワトソンが講演をした。昨年の卒業式の講演者はマザー・テレサ氏であった。式後ハーバード・ヤードに敷設されたテントや野外会場で、恒例の reunion が行われ、先輩後輩が互に交歓する。その折私が哲学の教師であることがわかると、ビジネス・スクールの学生達が、校歌の意味がわかるかというので、訳してやると歌詞の一節に寄附者に関するくだり（「寄附する人々 donators が、蓄積されて来た財産をさらに増やしてくれるように」）があって、彼らは初めて知る校歌の内容に微笑していた。私も寄附者勧誘など、私立大学ならではのことと思い苦笑したのであった。

ハーバードヤードの周囲を取りまいている建物はどれも古色蒼然としており、一番古いマサチューセッツホール（1720年）、2番目のワーズワースハウス（1726年）から始まってどれもつたが壁にからみついている文字通りアイビーのそれであるが、サイエンス・センター、最も高層建築のウィリアム・ジェームズホール（設計山崎）、カーペンター・センター（1963年）などモダン建築物も見られる。ことに視覚美術のカーペンター・センターは北米大陸における唯一のルコルビジェの作品ということで有名である。しかし全体的に見るとレンガの落ち着いた感じの中層の建物が多く、赤茶の持つ感じ雰囲気のごとくなくドイツの建築によく似ているとの印象を得た。それもその筈、「バウハウス」の創設者グロピウスが、アメリカに亡命、ハーバード大学の建築科の教授に迎えられ、その頃設計したものであることがわかった。

最後に、現代ドイツの演劇・映画に対する関心について触れておきたい。ブレヒトはアメリカに居住しただけあって、衰えぬ人気がある。私の滞在期間中にもハーバード大学の演劇部の学生達が『三文オペラ』を演じた。ハーバードには Loeb Dramacenter という非常に設備の優れた自前の劇場がある。アマチュアながらもなかなか迫力があつた。デュレンマットの『物理学者』は、反核運動の昂まりと相俟って各地で演じられていた。私はワシントンのアイゼンハワー劇場でそれを観たが、ニュートン、アインシュタインを狂言廻しに主人

公メビウスが現代の狂気を熱演して万雷の拍手を浴びた。映画ではイシュトヴァン・サボーの「メフィスト」、フォルカー・シュレーンドルフの「ブリキの太鼓」、ライナー・ファスビンダーの「リリー・マルレーン」などに人気が集まっていた。古いところではクリストファー・イッシャーウッドの「キャパレー」が何度か学寮で上演され、ライザ・ミネリ演ずるところのサリーがドイツ語専攻の学生達のアイドルになっていた。

以上「ドイツ」ならびに「ユダヤ」という両ファクターを軸にアメリカの印象を思いつくままに綴って来たが、今回のアメリカ体験は私に複眼的思考の重要性を認識させてくれた。今後は少なくとも私自身の思考法の「日本—ヨーロッパ（ドイツ）」の図式に、「アメリカ」が加わり、欧米日という観点に立ってオリエンティエリングが可能になるのではないかと思うようになった。これは大きな収穫であった。それはとりもなおさず幾何学の3点が定まれば平面が決まるというあの定理にも通じるように思えた。またハーバードでの1年間を通して多くの学者に接したのであるが、ドイッチュ教授を始めとしてルネッサンス的教養を備えた学者が数多くいるのに感心した。それは、ハーバード大学で一廉の教授といわれる者は幾つかの学問に精通しており、複数の学問分野の中に身を置かなければ本当の学者とは言われないというかつて聞いた話の通りであった。やはり良き意味でのプラグマティズムは生きているのである。

(注)

- (1) ゾーン教授の著作、翻訳の主だったものは次の通りである。

Zohn, Harry : Der Farbenvolle Untergang

Zohn, Harry : Karl Kraus

Translations :

- The Complete Diaries of Theodor Herzl
- Sigmund Freud's Delusion and Dream
- Walter Benjamin's Illuminations
- Marianne Weber's Max Weber : A Biography
- Selections from the German satirist Kurt Tucholsky

- (2) ここでかつて教えた Ralph Waldo Emerson (1803-82) の名が冠せられたレンガ造りの重厚な感じの建物で、正面玄関の上には PHILOSOPHY と刻まれ、側面入口の上部には次の碑銘が大きく刻まれている。

WHAT IS MAN THAT THOU ART MINDFUL OF HIM.

- (3) vgl. Walter Boehlich über Benno von Wiese : „ Ich erzähle mein Leben “  
(DER SPIEGEL 28. Juni. 1982. S. 153 f.)

- (4) HARVARD HYMN

Deus omnium creator,  
Rerum mundi moderator,  
Crescat cuius es fundator,  
    Nostra Universitas,  
Integri sint curatores,  
Eruditi professores,  
Largiantur donatores  
    Bene partas copias.

Sic dum civitas manebit  
Clarum lumen hic lucebit,  
Luce angulos replebit,  
    Fugerit obscuritas ;  
Error territus latebit,  
Virtus vivida valebit,  
Et insignior florebit  
    Nostra Universitas.

*Words by James Bradstreet Greenough, A.B. 1856*

*Music by John Knowles Paine, A.M. (Hon.) 1869*